
マスカレードに異常なし！？ 第3話 忘却の遺跡

水鏡樹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

マスカーレイドに異常なし!? 第3話 忘却の遺跡

【Nコード】

N6243A

【作者名】

水鏡樹

【あらすじ】

マスカーレイドという、小さな街。ウォルガレンの滝という巨大で美しい滝に魅せられた人々が開拓した街だった。そんなマスカーレイドに住む個性的な人たちの物語。第3話はハンターの知人である冒険家レッシュが登場。忘却の遺跡への同行を依頼される。行方不明者が続発している忘却の遺跡ではいったいなにが起こっているのか？

その1：冒険家レッシュ

まだ客足もそろわない、早朝のオートエーガン。

店内にはいつもどおり、クネスがコーヒーマー一杯でねばっていた。

それだけならいつもの情景だが、今日は一つ異なる点がある。

切れ長の目にすきとおった鼻、レザーアーマーの上から黒いジージャンを着込み、同じ

色でジーンズもそろえた若い女性の存在だ。

真っ赤に染まった髪をポニーテールにした彼女が無愛想に注文してから、早二時間が経

過しているが、黙々と本を読みながら、時折注文したコーヒーマーとサンドイッチを食す。

まるでだれかを待っているかのように。

「ニオ」

裏からシエラに手招きされたニオは、洗い物を中途半端のままキツチンへと入っていく。

「どうしたの？」

「彼女、なんだか怪しいわ」

「怪しいって？」

黙々と読書を続ける女性が怪しいなど、ニオには想像外の忠告だった。

だが、シエラの顔は真剣極まりない。

「きつと腕のいい盗賊よ。遺跡や洞窟の中の宝を掘り起こして、売りさばくような……」

「あら、埋もれた宝を世に戻してるんだから、悪い仕事じゃないと思っけど」

タオルで濡れた手を拭きながら、ニオは笑顔で答える。

「何かをたくらんでるに違いないよ。ああいう奴はひと癖もふた癖もあるようなやつらば

かりなんだ」

「シエラらしくない言い方ね。なにか盗賊に恨みでもあるの？」

純粹な二才の質問に、思わずシエラは目をそらす。

「昔の話よ。思い出したくもないわ」

「昔の話なら今は気にしないの！ 食い逃げしたわけじゃあるまいし、相手を不快にさせることいわないの。客商売なんだからね！」

二才から逆に一喝されて、シエラはあからさまに眉を吊り上げた。次の瞬間、入り口に備え付けられたベルの音が鳴り響く。お客さんが来たしらせだ。

「さっ、余計なこと考えないの。明日にも他の土地に行っちゃうだろうしね」

キッチンから二才が満面の笑みで出て行くと、来店者の正体はハンターだった。いつも

の迷彩服だが、ポケットに手を入れたままうつむいていて元気がない。

「いらつしゃいハンターさん。今日もAランチの肉抜きでいいのね」

「ああ……」

ハンターの返事にも力がなく、二才は少し拍子抜けしていた。

ハンターはカウンターに座ると大きく、そしてゆっくりと息を吐いた。

「どうかしたの？」

「なんだか嫌な予感がする」

もう一度ため息。顔の前で組んだ両手は、額を支える支柱と化した。

「嫌な予感って？」

「昔からあるんだよ。虫の知らせっていうか、ろくでもないことが起こる前に発生する胸

の中のわだかまりみたいな……」

「よくわからないけど……」

「背後から忍び寄りられて、ギツと首を絞められるような目にあったりしそうなんだよ」

「予感の割にはやけに具体的ね」

苦笑する二オにも顔を伏せたハンターにもわからないうちに、予感の時は刻一刻とせまっていた。

「それって、こんな感じかしら？」

ハンターの背後から聞こえた冷ややかな声に、二オが意識を向ける。

先ほどまで離れたテーブルに座っていたはずの女性が、いつの間にかハンターの首を絞めていたのだ。

紫色のマニキュアに白く透き通った両手　まるで死神のようだ。

「うわあっ！」

唐突にそばまで近寄られていたのと、突如殺人現場に変わった自分の店に二オが後退る。

声に反応して出てきたシエラは店内のありさまに慌ててキッチンへと戻ると、包丁を持って駆けつけてきた。

「ハンターから手を離せ、この薄汚い盗賊め！」

包丁を構えてじりじりとにじり寄るシエラ。

「盗賊って呼ぶな」

声　というよりも言葉に反応して、一滴の汗がハンターの頬をすべり落ちた。

「ちよつとしたジョークよ。力も入れてないし」

パツと手を離し、無抵抗の証に両手を挙げる。

刹那。

「わりい、Aランチ肉抜きキャンセル！」

「ええっ!？」

二オが反論するよりも早くハンターは脱兎のごとく逃げ出そうとした。だが。

「ちょっと、どこ行くつもり？」

椅子から素早く立ち上がったハンターに慌てもせず、女性は迷彩服の襟首をつかんでい

た。ジタバタ暴れるハンターを元の席へと叩きつける。

「くそつ、嫌な予感はいか。やっぱり家でおとなしくしとくんだった……」

観念したのか、ハンターはカウンターに突っ伏したまま、大人しくなってしまう。

「ハンターさん、この女性知り合いなの？」

事態を把握できないまま、二オがハンターへと質問する。

ハンターは顔をそのまま、指だけを女性に向けた。

「ああ、レッシユセルフィッシュって言うな。王都お抱えの敏腕盗賊だ」

「盗賊って呼ぶな」

背後からハンターの後頭部に向けて、レッシユのエルボーがヒックする。

ぐえつといううめき声が、辺りに響き渡った。

「二オでいいのかしら？ 初めまして。冒険家のレッシユよ」

差し出してきた右手を、二オが握り返す。

ニコツと微笑んでいるレッシユではあるが、手からは力強いオーラがあふれていた。

「ハンター、いまだに肉抜き注文してるわけ？ ちゃんと食べないと体に悪いわよ」

再びハンターの後頭部にエルボーをかますと、今度はうめき声ではなく反論が聞こえてきた。

「ちゃんと食べてるさ。家ではな」

「それは保存用の乾燥肉でしょ」

「長い生活で培われたんでね。乾いてないと肉って気がしないんだ」

ようやく顔を上げたハンターは、Aランチ肉抜き代わりにコーヒーを注文した。

レッシュはテーブルの上から自分のコーヒーとサンドイッチを、ハンターの隣へと運ぶ。

「で、なんの用なんだ。あんまり聞きたくないが……」

頭に手をやりながら、入れたてのコーヒーに口をつける。

レッシュは一度咳払いをしてから、ゆっくりと話し出した。

その2：盗賊って呼ぶな

「忘却の遺跡って知ってるわよね」

「ああ、マスカーレイドから半日ぐらいにある遺跡だろ？ 中には何にもないから調査が

終わった後ほったらかしにされてるわりに、王都の一部しか知らない辺鄙な場所だ」

「じゃあ、忘却の遺跡の近辺で、最近行方不明者が多発してるって言うのは？」

「さあ、聞いたことないけどな」

少しミルクをコーヒーに足しながら、ハンター。

レッシユは懐から数枚の紙を取り出すと、ハンターの前へとちらつかせる。

「この紙に書いてあるのが、あの近辺で行方不明になったと思われる人物よ。ざっと見て

も百人は超えてる。放っておいたら増える一方よ」

「そりゃ、そうだろうな」

「なんとも思わないわけ？」

「早急に手を打ったほうがいい。それぐらいだ」

コーヒーに口をつけかけ、ハンターはハッと閃いたかのように目を見開いていた。

カップを皿へと戻し、体ごとレッシユのほうへ向ける。

「まさか、おれに手伝えて言うんじゃないだろうな？」

「まさかもなにも、そのつもりだけど」

平然と返答するレッシユへの反論か、ハンターはカウンターをおもいきり叩きつけた。

「あのな、それは王都の仕事なんだろ！？おれはもっ……」

言いかけてハンターは周りを見やる。二才にシエラ、クネスもがみな珍しく声を荒げる

ハンターへと注目していた。レッシュだけは見向きもせず、サンドイッチをほおばっている。

「とにかくだ。引き受ける気はないね。どうしても言うなら報酬を準備してもらおう」

か。おれは賞金稼ぎなんぞでね」

まるで確認するかのように、職業の部分を強調させる。

レッシュは懐から札束を取り出すと、ハンターの前へと乱暴に叩きつけた。

「百万バツあるわ。単なる遺跡の調査にしては破格の金額だと思っけど？」

「おまえ、こんな大金どこで……」

「わたしの全財産よ。行方不明の中に友人がいてね、どうしても解決しないと気がすまないんだ」

「だからってなあ……」

「金額に不満があるの？」

真摯に見つめてくるレッシュに、とうとうハンターが折れた。

「わーったよ。まったく、いつまでたっても強引なところは変わらないな……」

「恩に着るわ。ハンター」

ぺこりと頭を下げるレッシュに、ハンターは鼻をフンと鳴らす。

「んじゃ、出発は明日だ。というわけでシエラ。お前も準備しとけよ」

「はっ？ わ、わたしが？」

突然の指名にあたふたしながら、シエラが自分を指差す。

「おれたちは二人とも銃撃が専門なんだ。前衛がいないと戦いづらいだろ？」

ハンターが述べる横で、レッシュが懐から銃を取り出して構えてみせた。ハンターと同

じ型のデザートイーグルだが、グリップにはRの文字が刻まれている

る。

「でも、わたし仕事があるし。それに……」

チラツとレッシユに視線をやる。レッシユは空になった皿とカッ
プを重ね、ニオへと渡
していた。

「ハンター。違う人を探しましょう。どうもシエラさんはわたしが気
に入らないらしい」

「そうなのか？」

ハンターがシエラに尋ねる。シエラが返答する前に、レッシユが
答えた。

「盗賊に恨みがあるんだってさ。まっ、わたしは盗賊じゃなくて冒
険家だけどね」

「あなた、盗み聞きしてたの!？」

シエラが警戒と嫌悪の表情で身構える。レッシユはさして慌てる
様子もなく、淡々と述
べた。

「人聞きの悪いこと言わないで。聞こえただけよ」

「嘘だ! 裏でこっそり話してた声が聞こえるはずないわ!」

「聞こえるのよ。いわゆる職業病でね」

横でハンターがプツと噴き出す。

「凄腕の盗賊だからな。聞き耳なんてお手の物なのさ」

「盗賊って呼ぶな」

ハンターが顔をしかめて立ち上がる。どうやらレッシユがカウン
ターの下ですねを蹴り
上げたらしい。

「だいたい、盗賊って呼び方がすでにおかしいのよ。わたしたちは
民家に入って泥棒をす
るわけじゃない。洞窟の中に入れば聞き耳や鍵開けの技術は当然必
要になる。旅をするも

のにとってはあって当たり前前の技術だ……そう言ったのは誰でし

たっけね」

「さあな、もう忘れたよ」

クククと齒の隙間から、笑いをこぼすハンターをにらみつける。

「とにかく、盗賊って呼ばれ方をするから変な嫌悪感を抱かれるんだ」

「でも盗賊ギルドには所属してるんでしょ？」

二才の問いに、レッシユはデザートイーグルを懐に戻しながら答える。

「そりゃあね、ギルドに加盟せずに鍵開けなんてしたら、一生追われちゃうし。だから盗

賊ギルドも名前を変えればいいのよ。冒険家ギルドとかさ。そう思うでしょ？」

ハンターに同意を求めるも、軽く相槌を打っただけだ。

「なるほどね。大体わかりました。シエラ、一緒に行つてあげなよ」

「二才!？」

「仕事は一日や二日ぐらいなら、わたし一人でも大丈夫だからさ。

シエラが手伝つてくれ

る前はずっと一人でやってたんだし。いざとなつたら飲んだくれの母さんもいるし」

キッチンからやたら大きなくしゃみが聞こえてくる。二才は苦笑しながら話を続けた。

「盗賊に対する偏見や誤解を解くいいチャンスじゃない」

「盗賊って呼ぶな」

「あ、ごめんなさい!」

すかさずレッシユから指摘を受け、あわてて二才は頭を下げる。

「と、とにかく、いつも休憩時間に柔軟体操とかしてさ。体なまってるんじゃないの？」

「そりゃあ……」

「剣の腕も鈍らせたくないし、機会があれば傭兵業にも戻りたいんでしょ？」

「まあ、ね」

頭をかきながらバツが悪そうに、シエラがそっぽを向く。

気にせず二才は手を打つと、一人で盛り上がった。

「んじゃ決まり！ 明日までにシエラより腕のいい傭兵なんてみつかるわけないんだから。」

人助けだと思つてさ、行つてあげなよ」

「二才がそう言うなら……行つてもいいよ。ただし、まだアンタを信用したわけじゃないからね」

レッシユに鋭い視線を送りながら、ビシツと指差す。だが、レッシユは大して気にしたようすもなく、

「別に信用してくれなくてもいいわ。あなたは腕が立ちそうだし、お願いします」

ハンターの時と同じように、頭を深々と下げた。口論は必至と身構えていたシエラも慌ててお辞儀を返す。

「じゃあこれで決定だな。出発は明日の早朝。二才、悪いけど保存の利く食料を二日分ぐらい用意しといてくれないか？ 日の出ぐらいまでに」

「オツケー。毎度ありがとうございます！」

二才の営業スマイルが炸裂する。苦笑いしながらハンターが、ふと気づいた。

「レッシユは今日どこで泊まるんだ？ まさか、俺の家とか言わないよな」

「そのつもりだけど……ダメかしら？」

さも当たり前のように答えたレッシユに、慌ててハンターが拒否した。

「ダメだダメだ！ お前も王都お抱えのとう……冒険家なら経費つてもんがあるだろ！」

それで宿屋にでも泊まれ！」

「経費なんてすずめの涙よ。安く上がればそれに越したことはないしね」

口論でたやすく説得できる相手ではないと悟っているのか、ハンターはそれ以上反論しなかった。

「まったく……百万なんて報酬用意するぐらいなら、宿賃ぐらい用意しとけつての」

うなだれたままコーヒー代をカウンターに置き、とぼとぼとハンターは出口へと向かっていく。

「じゃあ、これがわたしのコーヒーとサンドイッチ代ね。領収書もらえるかしら？」

「領収書？ ああ、必要経費の計算に必要なのね」

「いや、家計簿つけるのに」

「家計簿!？」

一瞬目を見開いた二才に、すかさずレッシュが反応する。

「おかしい？」

レジの下から領収書の束を取り出し、日付と金額を入れてから判を押す。

それを渡しながら二才がぼそりと呟く。

「盗賊つて、もつと大雑把な人だと思つてたから……」

「盗賊つて呼ぶな」

再び指摘されてしまい、二才は慌てふためいた。

「ご、ごめんなさい！ 悪気はないんだけど……」

顔をくしゃくしゃにしながら何度も頭を下げる二才に、レッシュは軽く微笑みながら、

「サンドイッチ美味しかったから許してあげる。今度から気をつけてね」

ポンと二才の頭をたたく。二才の表情は満面の笑みへと即座に変

わっていた。

「はい！ またのご来店、お待ちしております！」

最後に大きく礼をするニオを背に、ハンターとレッシュはオートエーガンを後にした。

その3：ウォルガレンの滝の前で

「こんなことだろうとは思ってたけど……」

「嫌なら宿屋に泊まれ。宿賃は貸しにしてやる」

ハンターの家　　というか、アパートの一室だ　　に案内された
レッシュは、部屋の有

様を目のあたりにして、全身から力が抜けていた。

カーテンが閉まった室内は、裸電球一つの明かりではまかなえないらしく全体的に暗い。

四畳半一部屋のハンターの部屋のうち、三分の一はベッドで埋まっている。残りの三分

の二はというと、脱いだ服や食事の形跡、タバコの吸殻がパンパンに詰まった空き缶などが散乱しており、足の踏み場もない状態だ。

「こんな生活してたら病気になるわよ」

数々の残骸をできるだけ避けながら、レッシュは奥にあるカーテンを全開にした。

裸電球の明かりを相殺して余りある太陽の光が、室内へと差し込んでくる。

「部屋を片付けるわよ。寝るスペース確保しないとねって、ハンター！」

レッシュが部屋の片づけを提案しているにもかかわらず、ハンターは一人ベッドの上に転がってしまった。

「任せる」

「自分の部屋でしょ？　整理整頓しようとは思わないわけ？」

「おれは別にこのままでもかまわん。好きにしてくれ」

早くも寝息を立てたハンターにあきれながら、レッシュは一人黙々と片づけを始めた。

ハンターが次に目を覚ますと、部屋は見違えるほどきれいになっていた。

脱ぎ捨てられた服はすべてたたまれて、部屋の隅へと一まとめにされている。食いカス

やたはこのすいならなどは、部屋の中央に置かれたゴミ袋へとすべてまとめられているらしい。

「さすがレッシユ。盗賊のくせに几帳面」

わざと盗賊という言葉を使い、サツと身構えるハンター。

だが、どこからも人の気配は感じられない。もちろん『盗賊って呼ぶな』の声もだ。

「レッシユのやつ、どこいったんだ？」

部屋を出ると、すでにあたりは暗くなっていた。遠くのほうでウルガレンの滝が、淡い光を発しているのがわかる。

とりあえずハンターはオートエーガンを尋ねてみようと家を出た。ハンターの住む住宅

街とオートエーガンは滝をはさんで反対側にあり、行くためには必ず滝の前の橋を渡らなければならぬ。

暗いとはいえまだ遅くない時間帯なので、道の人通りも少なくはない。

ハンターが橋を渡ろうとすると行き来する人の中に一人、立ち止まって呆然と滝を眺めている人物がいた。近づいていけばそれがレッシユだと分かる。

「なんだ、こんなところにいたのか」

ハンターが声をかけると、レッシユは一瞬だけハンターに視線をやり、すぐに滝へと戻した。

「せつかくマスカーレイドに来たんだから、この滝を見て帰らないと損じゃない」

「まあ、そうかもな……」

ハンターも改めて近くから滝を見上げた。岩石の中に含まれる光を発する組織が、水の

中から淡い発光を放っている。まるで第二の星空のように大小まばらに光る光景は今も昔

もマスカーレイドの人々の支えだ。

「いままで何度も旅をして、いろんなところに行つて、すごい財宝をいくつも発見してきた

けど、この滝に勝るものはなかったわ」

「当たり前さ。でなきゃこの滝のために、こんなに人が集まったりしないさ」

ハンターは滝の前から見渡せる景色を眺める。オートエーガンをはじめ、マスカーレイ

ドに昔から住んでいる人たちは滝が見える位置に家を構えていた。

ただ一人、ハンターを

除いて。

自嘲気味に微笑んだハンターは、そつとレッシユを盗み見た。相も変わらずハンターの

ほうへは向かず、滝の観光にいそしんでいるようだ。

「滝を見るなどは言わんが明日は朝早いんだ。そろそろ帰って寝たらどうだ？」

「わかつてる。もともとわたしの任務なんだ。度を越えた夜更かしなんてしない」

「それを聞いて安心した。盗賊が寝ぼけてたら調査なんてできやしない……」

「盗賊つて呼ぶな」

すかさず指摘されたハンターは、威圧感よりも安心感がわいてくるのを感じていた。

「ちゃんと聞いているなら、人の顔を見て話をしろよ」

「それは命令？ それとも忠告？」

「好きにとつてくれればいい。もう命令なんてできる立場じゃないからな」

後ろ手を振りながら、ハンターは滝の前から立ち去ろうとしていた。後ろからレッシュ

が慌てて声をかける。

「ハンター、一つ聞きたいことがある」

「んっ、なんだ？」

「どうして王都を去った？」

ハンターは顔を一瞬だけこわばらせるも、すぐさまもとの表情へと戻した。

手を腰にやりつつ、軽くにやけながら答える。

「過去は振り返らない主義でね。もう忘れたさ」

「……ハンターは変わったな」

うつむき加減で、レッシュは吐き捨てるようにぼやいた。

「そうか？」

「昔なら、真剣な質問にふざけ半分で答えたりしなかった」

ハンターは小さく鼻を鳴らすと、滝の上方を見上げて言った。

「だとしたら、それもオルガレンの滝のおかげかもしれないな」

満足げに二、三度うなずいてから、ハンターは自宅へと戻っていく。

レッシュはその姿を、唇をかみながらも優しい視線で見送る。

「滝のおかげか……」

レッシュは空へと向かってデザートイーグルの引き金を引いた。

こだまするはずの銃声は、とめどなく流れる滝の音ときれいに重なり合い、風にさらわれ消えていく。

「少なくとも現状に満足してるってわけね」

つぶやきつつ懐にデザートイーグルをしまうと、レッシュはハン

ターの後を追って帰路
へとついた。

その4：出発のとき

翌朝、まだ日が昇る前に三人はオートエーガンの前に集まっていた。冷え切った地面から上る冷気と、木々を揺るがす風が寒さをいやおうなく体感させる。

ハンターとレッシユは昨日と同様の服装の上に、毛皮のコートを羽織っていた。レッシユだけは武器とは別に、背中に背負えるナップサックを背負っている。

三人は寒そうに体を震わせながら、二オの保存食の完成を待っていた。

シエラはもちろんバイト中のエプロン姿ではなく、銀でできた胸当てと地面すれすれまで伸びるツーハンテッドソードを腰に付けていた。手には厚手の手袋。上着は身に着けていないが、胸当ての下のトレーナーは生地が厚く暖かそうだ。

「ごめんごめん、おまたせ！」

開店前のオートエーガンから、二オが慌てて姿を現した。外で待っていた三人とは反対

に、薄着でありながらも少し汗をかいている。

「そんな格好で寒くないの？」

震えながら尋ねるレッシユに、二オは力こぶを作ってみせる。

「調理場は暑いくらいだからね」

「若さもあるからな、レッシユにはない若さが」

横から茶々を入れたハンターは、言うまでもなく反抗のこぶしを食らっていた。

「それじゃあ二オ、行ってくるね」

シエラは二オから包みを受け取ると、三人は遺跡に向かって威勢良く出発した。

が、二才から肩を叩かれ、ハンターが足を止める。

振り返ると、二才は満面の笑みで両手を差し出していた。

「九千バツツになります!」

「やっぱり金とるの?」

「商売ですから!」

いったん間をおいてから、おずおずとハンターが話を切り出す。

「おれたちはこの近辺の安全のために……」

「商売ですから!」

「ちよつとぐらい安くならないか?」

「商売ですから!」

まったく笑顔を絶やさず言っただけの二才に、どうやら交渉など無駄なようだ。

「……わかった。報酬をもらったら払うからツケにしといて」

「毎度ありがとうございます!」

支払いの確約を得て、ようやく二才は手を振りながら三人を見送る体制に移る。

「またのご来店をお待ちしてまーす! 行ってらっしゃいませ!」

マスカーレイドを出る三人の背後で、元気な二才の声があたりに響き渡っていた。

その5：天使オシエイマス

木々の隙間を吹き抜ける風、大きくざわめく草花。

自然の網の目を抜けるように三人は半日ほど歩き続けた。

幸運にもモンスターに襲われたりはしていない。天気が悪くずれることもなく、途中でとった食

事休憩では、保存食とは思えない二才の料理に舌鼓を打つ。

順調に歩みを進めた三人は、昼過ぎごろには目的地『忘却の遺跡』にたどりついていた。

「遺跡って言っても、なにもないわね」

シエラの率直な感想どおり、辺りには遺跡らしき古びた建物など見当たらない。あるの

は木々に隠された二メートルほどの小さな穴だけだ。

「遺跡って言うより洞窟ね。入り口は王都の人間しか知らない。他の冒険者たちに

は無縁の洞窟よ。中も狭いし」

「狭いの？」

「十字に伸びる道と三つの部屋。それが忘却の遺跡の全貌なの。王都に残された地図を見れば一目瞭然ね」

レッシュが懐から出した紙に、シエラは軽く目を通す。入り口から入ってすぐに十字路

があり、それぞれの道の先に部屋が一つずつあるだけだ。他にはなにも見当たらない。

「この地図って、間違いないの？」

「昔の王都の関係者が調べたらしいから、間違いはないと思うけど。なんせ五十年以上前の調査だからね」

「んじゃ、ここで昼食をとってから入るとするか」

ハンターが日に当たる一帯を指差し提案すると、レッシユはナツブサツクから大きな布

を取り出した。朝食のときも活躍した紅葉模様の敷物だ。

2番と番号の振られた食事の包みを取り出し、ハンターは敷物の中央に広げた。昼食は肉

や野菜などをふんだんに活用したサンドイッチらしい。

ハンターは肉の入ったサンドイッチを避け、野菜の入ったものばかりを食べている。二

人はそれぞれ適当につかんだサンドイッチを食べ、食事も終わろうかという頃。

ガサツ！

洞窟入り口の脇から草を踏みしめる音と、確かな生き物の気配。

ハンターとレッシユはそれぞれデザートイーグルを抜くと、物音の根源へと向けた。シ

エラは口にサンドイッチをくわえたまま、剣の柄に手をそえている。

「シエラ、様子見てきてくれ」

「ふあ、ふあふあひ？」

「言つたる？ おれたちは銃が専門だから接近戦には弱いんだ」

くわえていたサンドイッチをほおばり、飲み込んでからシエラは剣を抜いた。

「損な役回りみたいね、わたし」

「仕事だからな」

レッシユにするどいツツコミを入れられ、仏頂面になりつつシエラは進んだ。

ガサツ、ガサガサツ！

物音は止むどころか、ちやくちやくと近づいてきている。

三人の間に緊張が走り、レッシユとハンターがデザートイーグルを構えなおした。

「ちよつと、間違つてわたしを撃たないでしょうね？」

剣を草むらに構えたまま、目線だけを背後にシエラ。

「安心しろ。九十九・九パーセント当たらん」

「嘘でも百パーセントって言ってほしかったわ……」

背中で泣いていると、レッシユがさらに追い討ちをかける。

「わたしは九十八パーセントぐらいだ」

「ハンターのほうが射撃うまいんだ　って、そういう問題じゃないでしょ！」

振り向いて文句を言った瞬間、シエラの背後に人影が姿を現していた。

「シエラ！　伏せろ！」

声と同時にシエラは横に飛んでいた。ハンターとレッシユが引き金に手をやる。

と、人影は慌てて両手を挙げた。白いローブを身にまとっていた。短い金髪に聡明さをうかがわせる顔立ち。

「ま、待つてください！　怪しいものじゃないんです！」

挙げていた両手を今度は前でバタバタと左右に振る。

「お、おまえ、なにもんだ？」

ハンターが銃を構えたまま一步一步と両手を出した人物へと近づいていく。レッシユに

いたっては、銃をおろして口をあぐりと開けていた。

シエラも横で出てきた人物を指差していた。正確には人物の後方をだ。

三人の視線の交わったのは、謎の人物の背中だった。彼は羽毛でできた白い羽を

生やしており、ピクピクと小さく動いているのだ。

「これ、本物か？」

「いたつ、ちよつと、やめてください！」

無造作に羽を引っ張ると、謎の人物は顔をしかめてハンターの手を振り払った。

「本物に決まってるでしょう！　大道芸人じゃあるまいし！」

「あなたが大道芸人じゃないとしたら、いったいなんなのかしら？
出会ったばかりのわ

たしたちが勘違いしても不思議じゃないと思うけど」

ようやく気持ちを落ち着かせたレッシュユが、するどいつっこみを入
れる。

「そ、それはそうですね、失礼しました。わたくしはオシエイマス
というものです」

「ほう、で、ここになんのようだ？」

「説明しますから、拳銃おろしてもらえませんか？ 怪しいもの
ではないんで」

オシエイマスの眉間へと向いていた銃口をそらすと、オシエイマ
スは胸に手を当て十字を
きつた。

「わたくしは遠い天使の国からやってきた、天使なのです」

顔の前で手を組むと、空に向かって頭をあげた。

その6：オシェイマスの目的

「天使だあ？」

「はあっ？」

「天使ですって！」

三者三様の声が響く。ハンターとレッシュに共通しているのはオシェイマスを見る疑いの目だ。シエラは反対に目を輝かせ、まじまじとオシェイマスを見つめている。

「あつ、信じてませんね！ わたしは天使の国を代表してここに来たんです。嘘だと思っ

なら問い合わせてもらってもかまいませんよ！」

「問い合わせるって言うてもねえ。天使の国なんて聞いたこともないし」

「アクサ医院に問い合わせるっていう手はあるがな。正気かどうか確かめるのに」

シシシシといじわるそうに笑うハンターに、レッシュが深々と同意する。

「疑われるとは遺憾です。どっからどう見ても天使ではありませんか！」

「そつよ！ 疑ったらかわいそうだわ！」

シエラがかばうように、ハンターとオシェイマスの間へと割って入った。ハンターがレ

ッシュに目をやると、レッシュはうつむいて首を振っている。

「んじゃ、あんたが天使だと仮定して」

「どうして仮定なんですか。断定してください！」

「……仮定してだ。こんなところでなにをしている？」

質問を受けるとオシェイマスは、いままでとは違ってかわって笑顔で答えだした。

「よくぞ聞いてくださいました！」

眼をランランと輝かせているオシエイマスに聞こえないよう、ポツリとハンターがつぶやく。

「聞かなきゃよかつたな……」

「なにか言いましたか？」

「いや、続けてくれ」

手を差し出したハンターに、オシエイマスは大きく頷いた。

「わたしの国が今大変な事態に巻き込まれているのです！ 度重なる疫病で病死するもの

が続出、天使はいまや絶滅の危機にみまわれているのです！」

こぶしを高々と突き上げて、オシエイマスが力説する。ハンターのそばまで来たレッシ

ユが深いため息をついたのも知らずに。

「我々天使の一族を救う手段はただ一つ！ 万病に効くと言われるユニコーンの角を持ち

帰ること！ ユニコーンの角のためならたとえ火の中の中！」

「ユニコーンの角？ この辺にそんなものがあるなんて聞いたことないけど」

レッシユが首をかしげながら、オシエイマスの力説に水をさす。

するとオシエイマスは人差し指を左右に振りながら、チツチと舌を鳴らした。

「これは確かな情報なのです！ 大昔から天使の国に伝わる由緒正しい書物に、ここがユ

ニコーンの住む洞窟だと明確に書かれておりました！」

「ユニコーンが住むって……ユニコーンを殺して角を取ろうとしてるわけ？」

「ユニコーンを殺すわけではなく、ユニコーンを普通の馬にするわけです。この薬で」

懐からオシエイマスが取り出したのは、細い試験管の中に入った

青い液体だった。

「これをユニコーンに飲ませれば、あーら不思議。ユニコーンはたちまち普通の馬になり角だけが取れてしまうというわけです。天使の国に伝わる秘薬ですね」

秘薬を懐に直し、オシエイマスはフンと胸を張った。

ハンターはシエラとレッシユの肩をポンと叩くと、親指で洞窟の入り口を指差した。

「天使の国って言葉が多々出てきて怪しさ満点だが、だいたい分かった。後は好きにしてくれ」

オシエイマスに背を向けて洞窟の入り口へと足を進める三人に、慌ててオシエイマスは

回りこんだ。

「待つてください！ よければわたくしも連れて行ってはもらえないでしょうか！」

「言っただろ？ 後は好きにしてくれ。じゃあな」

回りこんだオシエイマスを避けて、再び洞窟へと向かうハンター。逃がさぬようにオシ

エイマスはもう一度道をふさいだ。

「わたくし知識は豊富なのですが、実戦となるとからっきしダメです。ユニコーンがい

る奥の部屋までの間にモンスターにでも襲われたら……」

「達者でな」

三度避けようとするハンターを止めたのは、オシエイマスではなくシエラだった。

「ハンター。一緒に連れて行ってあげましょうよ。天使の国の一大事だって言ってるんだ

し、人助けならぬ天使助けだと思ってさ」

「シエラ、さっきの話を信じてんのか？」

「もちろんよ。背中に生えてる羽も本物っぽいし、天使以外にこんな羽が生えてる人間なんていないでしょ？」

顔を見合わせるハンターとレッシュに、シエラは純粋な目をぱちくりとさせながら首をかしげていた。

ひそひそと内緒話をハンターとレッシュが交わす。それからハンターはオシエイマスに聞いたでした。

「で、お前さんなにか役に立つのか？」

「回復魔法が得意です！ 怪我をしたときにはいつでも言ってください！」

「ほら、回復魔法をつかえるなんてすごいじゃない。わたしの言ったとおり連れて行ってあげたほうがよかったですよ？」

無邪気に鼻歌を歌いだしたシエラに、やれやれと二人が息をついた。

入り口から覗いた洞窟内は、真っ暗でなにも見えない。ときおり落ちる水滴の音だけがかるうじてレッシュの耳に届く。

「レッシュ、ランタン出してくれ」

言われてハンターの手でレッシュが乗せたのは、ランタンとは似ても似つかない一本の棒だった。

「なんだよ、これ」

「たいまつしかないの。ランタンは高いし」
「……………」

もはや口論する気にもなれず、ハンターは受け取ったたいまつに黙って火をつけた。

ボウツと燃えだしたたいまつのが、周囲を明るく照らし出す。

「ごつごつとした床がまっすぐと伸びているが、十字路はまだ見当たらない　もしくは
たいまつのみかりが届かないようだ。ところどころ天井からの水滴で水たまりができてい

るものの、無理をしなくてもまたげるような小さなものばかりだ。

「んじゃ行くか。先頭はレッシユとシエラ。真ん中がオシエイマスしんがりがおれだ」

「レッシユと隣か……」

不満げにつぶやいたのをハンターやレッシユが聞き逃すはずはなかった。

「シエラ、洞窟を探検したことはあるか？」

「商人の護衛とかが多かったからね。街と街の行き来をすることはあっても洞窟に入った

ことはないわ」

「だったらなおさらレッシユの隣にいないとダメだ。生きて帰れないぞ」

「ちらりとレッシユを見ると、レッシユはにこやかに手を振っていた。

「……なんか、ばかにしてない？」

「してないしてない、したこともない」

「どうだか……」

こうして奇妙な連れを抱えた三人は、洞窟の中へと進んでいった。

その7：進入、忘却の遺跡

たいまつを持ったハンターが、後ろから洞窟を照らす。

幅四メートルほどの洞窟が、まっすぐ前方へと伸びていた。

洞窟内には大きな黒い影が三つと、たいまつを反射する水たまり。時折たいまつを

炎に直接落ちた水滴が、ジュツという音をたてて蒸発していく。

まだ十字路も見えていない地点で、突如レッシユが立ち止まった。

そのまま進もうとし

ていたシエラを手で制す。

「どうしたの？」

尋ねるとレッシユは無言で地面を指した。その先には、あばらや腕、頭などの骨が今ま

でよりも明らかに多く転がっている。

「ここでモンスターにでも襲われたのかしら……」

「違うわね。死にたくないなら動かないで」

「でも先に進むにはここを通るしかないんでしょ？」

シエラが尋ねる前に、レッシユは自分の荷物から未使用のたいまつを取り出すと、目の

前に軽く投げた。

たいまつが地面に落ちると同時に床から無数の槍が飛び出し、シエラの鼻先をかすめる。

「うわっ！」

のけぞりしりもちをついたシエラの目の前で、飛び出した槍はゆつくりと地面へと納ま

っていった。背後からハンターの苦笑いが聞こえてくる。

「言っただろ？ 死にたくなかったらレッシユのそばから離れるなっ
て」

「そんなこと言っただって、こんなのわかるわけないじゃない！」

プウーツと頬を膨らませるシエラの横で、かがんだレッシユが地面を念入りにチェックし始めた。

「よく見ると穴がいくつも開いている。これはここから槍が飛び出すための通り道ってわけね」

「じゃあどうやって先に進むのよ？」

当然の疑問を投げかけるシエラを背に、レッシユはさらに調査を進める。

「ところどころに穴が開いてない床がある。ちょうど両足がつけるぐらいのね。目印に白

いチヨークで×印がついてるから、きつとわたしたち以前にここを通った人たちがつけた

印だと思うわ」

「すばらしい！ レッシユさんは凄腕の盗賊ですね！」

「盗賊って呼ぶな」

褒めたつもりのおシエイマスはレッシユの逆鱗に触れてしまい、いきにしぼんでしまっていた。

「じゃあ一人ずつ渡りましょう。間違っても印のついてない地面を踏まないように。串刺しになって死にたいなら別だけどね」

ハンターからたいまつを受け取ったレッシユは一步一步確実に印のついた地面を飛んでいく。そのまま五メートルほど進んだところで、レッシユは立ち止まった。

「この辺りまでくれば大丈夫みたい。それじゃあどんどん来て」
明かりのついたたいまつを、ちょうどレッシユとシエラの間の方に投げた。

たいまつはあっという間に槍全身を串刺しにされたが、明かりと

いう役目はきちんと全
うしていた。

「どう？ ランタンじゃできない使い方でしょ？」

「ランタンだったら、難なくここら一帯を照らしてるよ」

ハンターは反論しながら、とつとと×印だけを踏んで進んでいく。

「わたしは飛んでいきますので、シエラさんどうぞ」

言うが早いか、オシエイマスは背中の中のをばたかせた。天井ぎ
りぎりの高さを歩く程

度のスピードで飛んでいくと、難なくレッシユのそばへと降りたっ
ていた。

「踏み外すなよ、シエラ」

「わ、わかってるわよ！」

最後にシエラが慎重に、×印のついた場所だけを進んでいく。

ハンターはレッシユと変わらない程度のスピードでわたり終えて
いたが、シエラは一人

だけ五分以上かかってしまっていた。

「ハア、ハア……ちよつと、休ませて」

「だらしがないなあ、シエラ」

新しいたいまつをレッシユに受け取りながら、ハンター。シエラ
は言い返すこともでき
ない。

「ずっとウエイトレスやってたから体が鈍ってるのかな……」

「どつちかかっていうと洞窟特有の重苦しい空気だと思っけど。この
雰囲気慣れるには期

間が必要だから」

「おれなら洞窟探検よりも、ウエイターのほうがずっと疲れそうだ
……」

三人の談笑にオシエイマスが微笑みながら、ゆっくりと進んでい
く。ほどなくして地図

のとおり、十字路が姿をあらわしていた。前方への道は今までと

同じ程度の広さなのに

対し、左右の道は見るからに細く狭まっている。

「とりあえず十字路に畏はなさそうね。あとはどこから調べるかだけど」

「んじゃ、左手の法則だな」

「意味は？」

「特にない」

納得もしていないが反論もしないといった苦笑を漏らし、レッシユは言われたとおり右

に進んだ。三人もそれに続く。

いままでもりもお互いの身を近づけ、注意しながら細い道を進んでいく。

数メートルほど進むと、こじんまりした空間が姿を現していた。

「どうやら祭壇だったようね」

辺りを一瞥して、レッシュがぼそりとつぶやく。

正面の壁には十字架が、前方に啓示を送るように掲げられており、腰ぐらいの高さの

汚れたテーブルには、古ぼけた燭台が一本無造作に転がっている。

地面にはテーブルから落ちたと思われるもう一本の燭台があり、シミのようなものがつ

いた壺が、たくさんの破片となって地面へと飛び散っている。

他には数個のシャレコウベが転がっているが、入り口の畏よりは断然少ない。

「なにかを祭ってたのかしら？」

「さあな」

シエラの疑問に空返事を返し、ハンターが後ろから祭壇へと入ってくる。

落ちていた大き目の破片を一つ拾うと、

「なあ、オシエイマス。これなんだと思う？」

ひよいと背後にいたオシエイマスに投げ渡した。

「うわっ、ちよつと！」

慌ててオシエイマスが避けると、地面に落ちた破片は小さく粉々になっってしまった。

「い、いきなり変なもの投げないでください！」

「ただの破片だけ？ 当たったってたいした怪我にはなりやしない」

「そりゃ、そうですけど……」

明らかに顔をしかめているオシエイマスを尻目に、ハンターはさつさと祭壇を出た。

「ここにはなにもないらしい。次にいくぞ」

「ずんずんと進んでいくハンターに三人は慌ててついていった。

「左手の法則なら、次は入り口から正面の部屋？」

「一番大きな部屋ってのはなんかありそうだから、次は右だ」

隊列を元に戻し、レッシュが再び畏に注意しながら進んでいく。

右の道もさほどいかないうちに小さな空間があった。ただ左とは違い、ここにはなにも見当たらない。シャレコウベーフすら落ちていなかった。

「やっぱり正面が本命ってところか」

もと来た道に戻り、最後の道を進んでいく。

突き当りにはこれまでと違い、木製の扉が広い部屋の前に立ちふさがっていた。

「相当広い部屋みたいだし、なにがあってもおかしくなさそうね」

扉に耳をつけてレッシュが聞き耳をする。目を閉じて集中していたレッシュは、しばらく

くして首を横に振った。

「なんか嫌な感じ。いびきみたいのが聞こえてる」

「ドラゴン……とか言わないよな？」

「うーん、どっちかっていうとジャイアントとかトロールとか、そういう巨人系のモン

スターだと思う。それも三体ぐらい」

オシエイマスとシエラが二人して目を見開く。

「ど、どうして三体とか分かるんですか？」

オシエイマスが質問すると、横でシエラがうんうんと頷く。どうやら同じ質問をしたかっ
つたらしい。

「いびきの聞こえ方が三通りあるから。起きてるやつもいるかもしれないし、最低でも三体つてところかしら」

「三体か。まあトロールぐらいなら一人一体でなんとかなるか」
懐から二丁の拳銃を取り出して、扉の脇で身構える。

レッシユもデザートイーグル、シエラもバスタードソードをそれぞれ抜いた。

オシエイマスは構える武器もなく、ただ広がっていく緊張に身をひそめるだけだ。

「いくぞ！」

ハンターが先頭で扉を開けると、四人は一気に中へと飛び込んでいった。

その8：扉の奥は

部屋は非常に巨大で、たいまつ之光ではまったく全体を照らしきれない。

天井も相当高いらしく、こちらもたいまつ之光が届いていなかった。

真つ暗闇の中、ボーっと近辺だけを照らしているたいまつ。その範囲にモンスターの姿はなかった。

「あらら、これは困ったわね」

「だからランタン買っとけて」

「今度ね。ないものねだりしてもしょうがないんだからさ。あれ使いなよ、発光弾」

「特注で高いんだぞ、あれ」

「報酬入ったら、また作ればいいでしょ」

レッシュにせかさね、しぶしぶハンターは胸ポケットから拳銃の弾を取り出した。

「まったく、ランタンの数十倍の値段だったのに……」

抜いていたパイソンから今まで入っていた弾を取り出し、ポケットから出した弾を入れる

る。それからいろいろな方角に一発ずつ、計六回引き金を引いた。

放たれた弾丸はそれぞれ壁に当たる音と同時に、蛍光色の塗料が一带に付着する。

六発の弾丸で作られた蛍光塗料のしみは、かつかつ部屋全体を一望できる程度の明かりを生成していた。

「ハンターって、血糊の弾丸も持ってたよね……」

「役立つときが結構あるからな。目印にもつかえるし」

などと会話しながら、ハンターはパイソンに普通の弾丸を込めて

いと、

「う、うああああ！」

突然三人の背後から悲鳴が聞こえてきた。オシエイマスである。

「なんだ、うるさいな！」

耳を押さえながらハンター。オシエイマスはわなわなと、蛍光塗料で照らされた部屋の

奥を指差していた。

「サ、サ、サイクロプスです！ 三体の巨人ってサイクロプスですよ！」

「なに！」

慌ててハンターも部屋の奥へと視線を移す。レッシュはすでに気がついていたらしく、

銃身を握る手がわずかに震えているのを、左手で一瞬懸命おさえていた。

確かに奥のほうで寝ている三体の巨大な物体は、目が一つしかなかった。筋骨隆々で灰

色の巨大な体に、腰みの一枚だけまとっている。手には武器らしいものは持っていないし

見当たらないが、そのパンチだけで十分な殺傷能力をはじき出せるだろう。

さらに間の悪いことに、ハンターの銃声とオシエイマスの悲鳴で三体とも目を覚まそう

としているのだ！

「くっ、いったん引くぞ！」

後ずさりしながらハンター。だが、扉の前ではすでにシエラが四苦八苦していた。

「扉が、扉が開かないの！」

「なんだと！」

その声でわれに返ったレッシュが、扉を簡単にチェックする。直後、思い切り扉を蹴飛

ばしていた。

「ちっ、ワンウェイドアだ！」

「ワンウェイドアって？」

「片方からは簡単に開くが、反対からはまったく開かない扉だ」

「じゃあ、わたしたち閉じ込められたってこと!？」

一同、顔を見合わせてからサイクロプスの編隊へと顔を向ける。

三体のサイクロプスは寝ぼけながらも、少しずつその体を起こしつつあった。

「わ、わたくしはこれにて！」

捨て台詞とともに、オシエイマスは自慢の羽をはたかせて、飛び上がってしまった。

「ちよっと、なんで逃げるのよ！」

「怪我をしたら言うってください！ 回復魔法を使いに向かいますから！」

「あんなのから攻撃食らったら、怪我どころ以前に死んじゃうわよ！」

シエラの悲痛な叫びに反応することなく、オシエイマスは上空へと消えてしまった。

「ど、どうするのよハンター。あんなやつら相手にできるの?」

おびえきったシエラを前に、ハンターはデザートイーグルの銃身を強く握った。頼りになる相棒の存在を確認するかのようにな

なる相棒の存在を確認するかのようにな

「一人一体だ。できるな？」

「ちよっと、なに言ってるの！ あんなのに勝てるわけないでしょ！」

即刻否定するシエラの横で、レッシユが小さく頷く。

「やるしかないってことですね。隊長」

隊長と呼ばれたハンターは一瞬驚きつつも、自嘲気味に鼻を鳴らす。

「ポイントは三つ。まず巨人はその巨体のため動きが鈍い。うまく

攻撃をかいくぐればチ
ヤンスがうかがえるはずだ」

レッシュが無言で頷く。シエラは半泣きになりながらも声を上げるのだけは自重しているようだ。

「二つ目は一つ目だ。別にシャレじゃないが」

だれも笑わなかった。ハンターは一度咳払いしてから、話を続ける。

「サイクロプスの弱点は一つしかない目だ。目を失えばサイクロプスはまともに行動でき

はしない。まず目を奪うことを考える」

今度は同時に二人が頷く。

「最後のポイントは、三人そろってマスカレードに帰ること。以上だ」

すでにサイクロプスは巨体を起こし、食事である三人を見下ろす段階まで来ていた。

ハンターとレッシュが素早く左右に散開し、それぞれがサイクロプスに銃弾を撃つ。サイクロプ

スの足に当たった銃弾は、わずかな鮮血を垂らすだけで大きなダメージを与えてはいない。

それでもサイクロプスは銃弾の主を最初のターゲットと確認したようだ。残りの一体はわずかに

震えているシエラを凝視している。

理想的な一対一の対決に持ち込んだハンター達。戦いの火蓋はきられたのだった。

その9：それぞれの1対1

ハンターは自慢の二丁拳銃を強く握りながら、次の手を考えていた。銃撃にはもちろん

自信があつたが、十分な明かりのない状況ではまともに撃てると思えない。

「暗視スコープでも作ってもらつとくんだつたな……」

小声で愚痴を言いつつ、サイクロプスが振りかざしたコブシを落ち着いてかわす。

地面にあたつた鉄拳は、難なく地面の岩をも砕いてしまった。

「シヤレになつてないな」

ハンターはサイクロプスの目に向かって交互に三発ずつ、計六発を放つた。

ギョロリとハンターをにらむ一つ目の付近から血が流れ出すも、目には直撃していない。

「ラッキーヒットを狙うか……性にあわないな」

サイクロプスの目はコブシほどの大きさはあるが、身長之差を考えれば七メートルは離

れている。さらにゆっくりではあるが動いているため、狙撃は非常に困難だ。

「まずは動きを止める 足か！」

ハンターは弾丸を込めなおすと、全弾をサイクロプスの右足に向けて発射した。目とは

大きさも距離も違う足は、ハンターにとって格好の的となった。

「グギャオオオオ！」

さすがのサイクロプスも同じ範囲に銃弾を何度も食らえば、大きなダメージとなつたよ

うだ。足を抑えながら大きく後ろにのけざると、尻餅をついてしまった。

背中を壁にぶつけ、動きの止まったサイクロプスの目を狙おうと
していたハンター。弾
を込めなおしながらふと頭をよぎる。

「目を狙うのは簡単だが、暴れだしたら手がつけられんな……」
瞬時に作戦変更をしたハンターは、サイクロプスの左側へと回り
こむ。

そしてこめかみめがけて再び全弾発射した。

動きの止まっていたサイクロプスは避けることもできず、耳のや
や上方へ次々と弾丸が
突き刺さっていく。

しばらくするとプシューと血が噴出し、サイクロプスは動かなくな
ってしまった。

「まったく、手間と弾丸かけさせやがって……」
拳銃に弾を込めなおしてから懐へと戻す。ハンターは大きく息を
吐いてから戦況を見極
めようと顧みていた。

レッシユはサイクロプスのこぶしをかいくぐり、心臓めがけて銃
弾を打ち込んだ。

わずかに血が流れ出すものの、硬い筋肉に覆われて心臓まで届い
ていない。

「やっぱり目を狙わないとダメね」

ため息混じりに吐き捨てる、レッシユはデザートイーグルのマ
ガジンを取り替える。

「こんな距離から目なんて狙えないし。どうしようか……」

今度は踏みつけようと足を大きくあげたサイクロプスの攻撃を、
なんなく交わす。回避

のスピードならレッシユには自信があった。

「しょうがない、やってみるか」

天井に向かって一度だけ引き金を引き、

「ドキウヂコハ、ハエチルアギイ！」

サイクロプスが使うといわれているオーガー語でレッシユが叫ぶ。「ニアヂナ、サハサメギイ！」

サイクロプスは青筋を立てて今までよりも荒れた攻撃を繰り返してきた。レッシユは身

軽にかわしつつ、できるだけサイクロプスの前後へと移動を繰り返す。

「イアチハサエゴクニアト、モンテベットチットキヲソレ！」

さらにレッシユが叫ぶと灰色だったサイクロプスの肌に赤みが差し、一つしかない目が

血走っていく。さらに攻撃を続けるサイクロプスだったが、なれないう連続攻撃に足をすべらしてしまった。

巨体が一度宙に浮き、地面へと落下する。地震と間違えてしまいうような地響きにふらつきながらも、レッシユはサイクロプスの腰に駆け寄った。

腰みのを利用して倒れたサイクロプスの上へと登攀する。サイク

ロプスは少しの間目を回していたが、自分の体の上で動いている違和感にすぐさま反応していた。

レッシユを捕まえようと、左右の腕で交互に襲い掛かる。レッシ

ユはしゃがんだり、飛び跳ねたりしながらうまくよけ、少しずつ頭のほうへと移動してい

く。

胴体の中ほどまで来ると、サイクロプスは起き上がるうと首を起

こしにかかった。それを待っていたかのように、レッシユはサイクロプスの一つ目に弾丸を撃ち込む。頭のすぐ

そばまで来ていたレッシユには、難しくはなかった。

「グガゴォ！」

サイクロプスは再びのけぞり、両手で目を押さえながら暴れだしていた。

「わわっ、暴れるな！」

グラグラと揺れるサイクロプスの上でバランスを取りながら、レッシュは心臓 先ほど

の一発命中している怪我の跡だ に銃弾をありったけ撃ち続けた。弾がきれると慣れた手つきでマガジンを取替え、また心臓へと撃ち込む。

数十発の弾丸が心臓へと命中すると、まるで噴水のように血を噴き出し始めた。

「ギャグオオオ！」

サイクロプスは二度目の悲鳴を上げながら、腕を天井に向けて長々と伸ばす。すぐさま

腕は地面へと戻され、サイクロプスは動かなくなった。ほぼ同時に心臓から出ている噴水も止まる。

「ふう……」

額にかいた汗をぬぐうと、レッシュはサイクロプスの体から飛び降りた。自分の役目を果たしたことに、微かな笑みを浮かべながら。

横目でハンターとレッシュの戦いぶりを見ながら、シエラはバスタードソードを握りなおした。

歴戦の友も今回ばかりは少し頼りなく感じる。バスタードソードでサイクロプスの目を狙うのは、拳銃で狙うよりはるかに困難だろう。

ハンターやレッシュの武器である拳銃は飛び道具であり、地面にいても目を狙うことはできる。だがシエラのバスタードソードでは、空でも飛ばない限り

目を狙うことは難しい。

「思いきって投げてみる？ ダメダメ、外したら丸腰になっちゃう！」

自分のアイデアを即座に否定しつつ、サイクロプスの最初の攻撃をかわす。確かにハン

ターの言うとおりの動きは早くなく、落ち着いて行動すれば見切れないでもない。

「ハンターやレッツシュが倒して、手伝ってくれるのを待つ？」

それが一番無難な考えかもしれない。だが、それもすぐさま否定することとなった。

「いや、ハンターは一人一体と言った。まったく役に立ってないんだから、本職の戦闘ぐ

らい自分でがんばらないと！」

一瞬傾きかけた甘えを振り切り、バスタードソードを手の中で横転させた。

シエラの二の腕に、ぐっと力がこもる。

直後サイクロプスは手を組むと、シエラに向かって思い切り叩きつけた。

「うああ！」

転倒しながらもシエラは、危ういところでサイクロプスの攻撃を避ける。地面に叩きつ

けられた拳により巻き起こった風が、シエラの髪を大きく揺らした。「このっ！」

受身を取って起き上がったシエラが、振り向きざまにサイクロプスの腕を切りつけた。

プシュツという音と共に血が一瞬だけ噴き出し、だらだらと腕を伝って地面へと落ちる。

それでもサイクロプスはまったく動じていない。虫にかまれた程度にしか感じていない

のか、傷口をぼりぼりと搔いているだけだ。

「……まじ？」

今度は踏みつけようと足をあげるサイクロプス。シエラは動きを落ち着いて見定め、難なく回避に成功した。

「でも、このままじゃ埒があかないわね」

サイクロプスの死角に回り込み、考えをめぐらす。いくつか作戦が思い浮かぶも、実現可能なのは一つだけだった。成功確率も低く、一発勝負で失敗すればサイクロプスに対策を練られてしまう。

失敗する地点によっても違い、最悪ならばそのままあの世行きになる可能性もある。それでも一番現実的なのだから、シエラは少し泣きなくなった。

大きく短く息を吐き覚悟を決めると、シエラは再びサイクロプスの視界へと身を投じる。

サイクロプスは不敵な笑みを浮かべながらシエラを見下ろしていた。大きく右手を上にするように少しだけ移動する。

地面にたどり着いた拳が、地面の岩へとめり込む。次の瞬間、シエラはサイクロプスの指と指の間に手をかけ、勢いよく腕を登っていった。

手首、肘、二の腕を通過し、時折バランスを崩しながらも肩へと到達する。

サイクロプスが肩まで上ったシエラに反応し、首を回してシエラを追う。それがシエラの待ち望んでいた瞬間だった。

「でやあああああああ！」

雄たけびと共に飛び上がると、シエラは大きく振りかざしたバスタードソードをサイクロプスの目に突き刺した。

「ぎゃごおおお！」

苦痛に顔をゆがめるサイクロプス。両手で一つ目を覆う直前に、シエラが全体重を下方へとかけた。

切れ味鋭いバスタードソードは、そのままサイクロプスの胸、腹を切り裂きつつ

シエラと共に下っていく。

噴き出す血はまるで滝のように流れ落ち、シエラを頭から真っ赤に染めていった。

胴体を立て一文字に切り裂き、シエラは地面へと無事着地する。

サイクロプスは背中からその場に倒れ、ピクリとも動かなくなっていた。

その10：ハンターの推理

「おおっ、さすがはシエラ」

「腕が立つとは感じていたけど、まさかこれほどとは……」

肩で息をしているシエラの後ろからハンターとレッシユが歩み寄ってきていた。

「ちよっ、終わってたんなら手伝ってくれても！」

「いやいや、おれたちも今終わったんだって。なあ？」

「ええ。やつかいな敵だったけど、これで安心ね。じゃあわたしは出口を探すから」

言いながらナツプサックからタオルを取り出すと、シエラに向かって軽く放り投げる。

「とりあえず拭いたほうがいいわ。匂いは家に帰ってお風呂にでも入ってね」

「あ、ありがと……」

返事の変わりにレッシユは微笑むと、サイクロプスの影へと消えていった。

「こいつらが行方不明者の原因だったのかな？」

体にこびりついた血液をタオルで拭きながら、シエラがハンターに尋ねる。

ハンターはあごに手をやりながら小さく首を振った。

「直接的にはこいつらだろうが、間接的には違うな」

「それって……」

シエラが聞き返そうとしたとき、空中から一つの人影が舞い降りてきた。オシエイマスである。

「みなさん素晴らしい強さですね！ サイクロプス三体を相手に怪我一つないなんて！」

「へへへ、まかせてよ」

得意げにVサインを送るシエラだったが、オシエイマスは顔をしかめていた。

「なんかすごい匂いですね……」

「サイクロプスの血がいつぱいついちゃったから。早くお風呂に入りたいわ」

「だったら匂いだけでも消してあげますよ。そういう魔法がありませんから」

「本当に！？じゃあお願いね！」

ペコリと頭を下げるシエラの傍で、オシエイマスが口早に魔法を唱えだす。

「おいっ、ちょっと待て！」

ハンターが止めるまもなく、オシエイマスの詠唱は終了していた。ふんわりとした空気につつまれて、シエラは心地よさげだ。

「うわあ、石鹸のいいにおい。あれ？ なんだか眠くなつて……」

そのまま地面に倒れそうになったシエラを、オシエイマスが受け止める。

「動くな！ シエラに触るんじゃない！」

懐からデザートイーグルを取り出し、オシエイマスへと向ける。

「フ、フフ、動くなですと？ それはこっちのセリフです」

明らかに今までの猫なで声とは違う、威厳のある声。オシエイマスの手は、気を失っている

シエラの首元へと当てられている。

「この小娘の首を搔っ切られたくなければ、動かないでくださいね」

「ようやく本性を現したか、ユーワーキー。天使の姿をした悪魔め」

ユーワーキーと呼ばれたオシエイマスは一瞬だけ動揺し目を見開いていたが、すぐに不

気味な笑みを漏らすようになっていた。

「どこで気づいていたのか、教えてほしいものです。今後の参考にしますので」

「最初から予感があった。この洞窟に入ってからは、確信に変わっ

たがね」

「……………」

ハンターとオシエイマスはお互いにらみ合ったまま、一歩もひるんでいない。

「まずこんな辺鄙な洞窟のそばで、行方不明者が多発すること自体おかしかった。モンスター

ターの多発地域でもなし、この洞窟は存在すら臆。つまり、近辺に冒険者を死へと扇動す

る輩がいたはずだ。ユニコーンの話もその一環だな。正義感の強い連中は仲間を助けよう

とするアンタの手助けのため、あくどい連中はユニコーンの角を横取りするため、あんと

と一緒に洞窟内へと入っていくわけだ」

「ククク、いい読みです。サイクロプスの餌になった連中とは違うようですね」

オシエイマスは楽しそうに、ハンターの話に聞き入っていた。ハンターは続ける。

「次に祭壇でみつかった壺の破片だ。破片を一つ見たただけだとわかりにくい、シミにみ

えたのは悪魔封じの魔方陣だろう？ おそらくアンタはあの壺に封印されていたはずだ。

たまたまこの洞窟を見つけてしまったただれかが、気がつかずに封印を解いちまつたんだろ

う。だからお前は小さな破片でも、自分の体に触れるのを嫌がったんだ」

オシエイマスはなにも言わず、口元をさらにゆるませる。

「最後にここにいたサイクロプスだ。どう考えても入り口から入ることはできん。それに

本来なら巨人族は単体で行動することが多い。こんな洞窟の奥で三体ものサイクロプスが、

おとなしくしているはずがない。アンタは魔法でサイクロプスを生け捕り、小さくしてこ

こへと連れてきた。そして人間を攻撃するよう操っていたんだ。もつとも、サイクロプス

にとつて唯一の食料元が足を踏み入れる人間なのだから、自分を襲わないようにする操り

方だったかもしれんがな」

ハンターの持論がすべて終わると、オシエイマスは無邪気に拍手を繰り返した。

「すばらしい、すばらしいですよハンター君。きみの予想は百パーセントの中です！」

と、慌ててわれに返り、オシエイマスはシエラの首元へと手を戻す。

「おつとと、危うく撃たれてしまつところでした。千載一遇のチャンス逃すとは、ハンター君らしくありませんでしたね」

クククと怪しく笑うオシエイマスに銃口を向けたまま、ハンターはつばを吐き捨てた。

「胸糞悪いぜ、ユーワーキー。サイクロプスにやられてのた打ち回る人間の姿が、そんなに楽しいか？」

「ええ、楽しいですとも。本来ならやられてわたしに助けを請う連中を、あざ笑いながら

見下ろすはずだったので。まさかサイクロプス三体がやられるとは……今度はもつと

強いモンスターを連れてこなくてはいけませんね」

「今度があると思ってるのか？」

「ありますとも、ハンター君はこの小娘を見殺しにしてまで撃つことはできない。もちろ

んわたしは銃撃などで簡単には死にません。銀の弾でもない限りね」

「この拳銃の弾が銀の弾でないとどうして分かる？」

「銀の弾であれば、もう撃っているはずですからね。といっても痛いのに変わりはありません」

「せんから、そろそろ捨ててくれませんか？」

「シエラの首元に、鋭く伸びきったつめを押し込む。小さく傷のついたシエラの首から、

赤い血がわずかに流れはじめた。

「わかったよ。おれの負けだ」

「ハンターは持っていた拳銃を、おもいつきり後方へと投げた。遠くのほうで地面に落ち

た拳銃の、ガシャンという音が響き渡る。

「オシエイマスはシエラを抱えたまま、ゆっくりと立ち上がった。

「ではさっそく、ハンター君から死んでもらいましょうか。もちろんこの小娘は助けて差し上げますよ」

「嘘はいいから、早く殺してくれ。もう覚悟はできてんだ」

「賢い判断です。では……」

「大きく振りかざした右手が、無常にもハンターの心臓へと狙いを定められていた。」

その11：脱出、忘却の遺跡

「さようならハンター君！」

オシエイマスが腕を振り下ろした、まさにその瞬間だった。

銃声がどこからともなくこだまし、ハンターの心臓の手前でオシエイマスの腕が止まる。

もちろんその隙をハンターが見逃すはずがない。懐にあったもう一丁の拳銃であるパイ

ソン4インチを抜くと、すばやくオシエイマスへと撃ち込んだ。眉間、首、心臓へと風穴を開け、オシエイマスは背後へと吹っ飛んだ。

シエラはハンターのそばにがりりとひざを落とし、そのまま横たわった。シエラの首元から、軽く血をぬぐう。

「バ、バカな……」

ハンターに撃たれてできた風穴からは、青い血が大量に流れ出している。だが、それらの

の傷よりも、最初に撃たれていたわき腹を一生懸命押さえていた。

「どうして長話をしたか。どうしてシエラから手を放した隙に撃たなかったのか。どうし

て思いつきり遠くに拳銃を投げたか。わかるか？」

足音もなく人影が近づいてくる。それはデザートイーグルを構えたレッシユだった。

デザートイーグルの先からは、硝煙が立ち昇っている。

「すべてはレッシユを 敏腕盗賊の相棒に気づいてもらうためさ」「盗賊って呼ぶな」

ポーズを決めていたハンターは、背後からレッシユに頭をはたかれてしまった。

「なぜだ、なぜ銀の弾を……」

ハンターに問うオシエイマス。ハンターが口を開く前にレッシユが代わりに答えた。

「王都直属の部隊は、常に銀の武器を使ってるのよ。残念だったわね」

「お前の言ったとおりさ、オシエイマス。おれの拳銃には銀の弾は入っていなかった。持

つてはいたが、こめなおす暇はなかったからな。シエラに手出しできないほどのダメージ

を与えるには、レッシユの一撃がほしかったんだ」

「バカな、わたしは……」

口から青い血を大量に吐き出したオシエイマスはシエイマスは地面と熱い口づけをかわし、そのままピクリとも動かなくなった。

「助かったぜレッシユ。よく気がついてくれたな」

「拳銃を落とす音はピンチの証。そう教えてくれたのはハンターだったでしょ？」

「覚えてなかったらどうしようかとひやひやしたぜ……」

額にかいていた汗をぬぐいながら、大きく息を吐き出す。

ようやく一息つけたハンターは、相棒の存在を思い出していた。

「投げた拳銃探してくるから、シエラのようにすみててくれ」

「了解」

音のした近辺をくまなく探すと、難なく投げた拳銃を発見できた。少し傷がついている

ものの、作動に異常はないらしい。

早足でレッシユの元へと戻ると、血の出ている傷口にレッシユが絆創膏を貼っていた。

「これで一件落着だな」

「ええ、ありがとうハンター。これが報酬よ」

荷物の中から百万バツ入った封筒を、ハンターへと渡す。ずしりと重たく厚みのある

封筒を、ハンターは上着の内ポケットへとしまった。

「出口見つかったから、日が暮れないうちに帰りましょう」

ハンターが気を失ったままのシエラを背負い、レッシユの案内で出口へと向かう。着い

たところはただの壁だったが、レッシユが岩肌の一部を触ると壁が動いて出口が姿を現した。

「ん……あ？」

開いた扉から飛び込んできた日光で、ハンターの背中で眠っていたシエラが目を覚ます。

まだ寝ぼけているのか、目をこすりながらハンターに問いかけてきた。

「あれ？ オシエイマスは？」

「オシエイマスは……」

説明しようとするレッシユの口をさえぎり、ハンターは小さな声で答えた。

「ユニコーンが見当たらなかったから、次の場所を探すってさ。シエラにもよくお礼を言

つといてくれて」

「そうなんだあ。助かるといいね、天使の国」

そう呟くと、シエラはまたハンターの背中で寝息を立て始めていた。

「いいの？」

「人をすぐ信じるのは、シエラにとって短所ではあるが長所でもあるからな」

「わたしはまだ信じてもらってないみたいだけど……」

プクーツと頬を膨らませてふてくされるレッシユに、ハンターはフツと笑みを漏らす。

「そんなことないさ。一緒に旅して戦って、立派な仲間だろ？」

「それもそうね」

膨らませていた頬を戻し、スキップしながら先を進むレッシユ。

「これからどうするんだ？」

ハンターが問うと、レッシュは足を止めて振り返った。

「そうね。とりあえずマスカレードに泊まって、明日王都に帰ることにする」

「もう厄介ごと持ち込んでくるんじゃないぞ」

言いながらハンターは、最初の目的を思い出していた。

「そういえば、行方不明者の中に友人がいたって言ってなかったか？」

「はてさて、なんのことかしら？」

「ちよつと待て、おまえなあ！」

走って逃げるレッシュをみながら、ぼそりとつぶやく。

「やっぱり根っからの盗賊だよ、おまえは」

「盗賊って呼ぶなあ！」

いつもどおりの反論をしてくるレッシュ。だが、その顔は笑顔に包まれていた。

その12：百万バツツの行方

レッシュが帰ってから三日、ハンターは久しぶりにオートエーガンを訪ねた。あくびま

じりに店内に入ると、二オの元気な挨拶が聞こえてくる。

「いらつしゃい、ハンターさん。いつものね」

「ああ、頼むよ」

カウンターの席に着くと、背後の席ではクネスが一生懸命にペンを走らせている。原稿

の横にはメモの束があった。もしかしたらシエラから今回の冒険について詳しく聞いたのかも知れない。

シエラはモップで床の掃除をしながら、いつものエプロン姿へと戻っていた。傭兵家業

はあの一日だけで、新たな依頼は入ってこないらしい。

「おまたせ、ハンターさん」

二オがキッチンからハンター用の肉抜きAランチを持ってくる。

「おおつ、久しぶりだな。いただきます」

さっそく食べようと箸を割ると、ひょいっと二オは肉抜きAランチを取り上げた。

「なんだよ、いたずらか？」

無言で首を振る二オは、Aランチの代わりに手を差し出した。

「この間の保存食代九千バツツ、先に払ってよね」

「食べた後でいいだろ？」

「いえいえ、オートエーガンではツケの完済が注文を受け付ける条件ですぞ！」

営業スマイルで答える二オにはれないよう、ハンターは小さく息を漏らした。

「まったく、百万バツツあるから逃げやしないっての」

内ポケットからレツシユにもらった封筒を、ハンターが得意げに取り出す。

「それが百万バツツ？」

二才が尋ねるのも無理はなかった。封筒は薄っぺらで、どう考えても大量の札束が入っているとは思えない。

「ん、なんだこりゃ！」

慌ててハンターが封筒を開けると、中には五万バツツと紙切れが一枚入っていた。

「確かにもらったときは、ずしりと重さも厚みもあったのに……」
あつげにとられていたハンターから、二才が紙切れを取り上げる。そして、書いてある内容を読み始めた。

「領収書、ハンター〓バウンティ様……九十五万バツツ！」

「なっ、なにに！」

絶叫しながらハンターは、二才の手から紙切れを取り返した。内容は。

『領収書

ハンター〓バウンティ様

九十五万バツツ

但しルームクーリング代として

確かに領収いたしました。

レツシユ〓セルフィツ

シユ

ご丁寧に拇印まで押された領収書をにらみつつ、手がわなわな震えている。

一方二才は一万バツツ札をハンターから取り上げると、代わりに千バツツ札をカウンター

へと置いていた。

「毎度ありがとうございまーす！」

心地よい挨拶と共に、ハンターの前に肉抜きAランチをおく。

「わたしも当然、これぐらいはもらう権利があるよね？」

横からひよいと顔を出したシエラが、四万バツツほど取り上げる。
最後に残ったのは代

金を払っていない肉抜きAランチと、千バツツ札一枚だった。

「これじゃ、使った弾丸代にもならねえ……あいつはやっぱり根っからの盗賊だよ！」

ハンターのむなし雄たけびがオートエーガンで響きわたる。どこからか『盗賊って呼

ぶな』という声が、聞こえてくる気がした。

～END～

その12：百万バツツの行方（後書き）

どうも、水鏡樹です。最後まで読んでいただき、ありがとうございます
ましたm（――）m

『マスカーレイドに異常なし!? 第3話 忘却の遺跡』いかがだ
ったでしょうか？

今回はファンタジーらしく、ダンジョン（といっても、小さいもの
ですが）と、

モンスターとのバトルを主に書いてみました。

ハンター、レッシュ、シエラの活躍はいかがだったでしょうか？

ぜひ評価&コメントもお聞かせくださいm（――）m

まだまだ『マスカーレイドに異常なし!?』はシリーズとして続い
ていきますので、

今後とも読んでいただければ幸いです

ちなみに本文に出てくるオーガー語は、

ちよつとした変換で読めるようになります。

暇があればこの謎にも挑戦してみてください。

ヒントは『一歩前へ!』です。

では

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6243a/>

マスカレードに異常なし！？ 第3話 忘却の遺跡

2010年10月15日22時19分発行